

論 壇

沖縄のしきたりと心の問題

沖縄国際大学 教授

井村 弘子

「心」はどこにあるのだろうか。幼い子に尋ねると、だいたい胸のあたりに手を当てる。小学生の高学年頃になると、頭部を指す子どもが増えてくる。思考や記憶や感情を頭の働きに結びつけ、次第に脳の機能に関心が向けられるのであろう。

沖縄の民間信仰では、魂（マブイ）が人の体内に宿り、生命や精神活動をつかさどっていると考えられてきた。マブイと身体は普段はともに機能し合っただけで心身の健康を維持している。ところが、転んだり、何かにひどく驚いたり、事故に遭ったり、悲しい出来事を経験したりすると、マブイが体から離れてしまうことがある、という。マブイが抜け落ちると、とたんに体がだるくなる、何かを非常に怖がる、眠れなくなるなど困った状態になる。落としたマブイは、一刻も早く元の体に呼び戻さなければならない。そのための御願（儀礼）が「マブイグミ（魂込め）。魔よけや、線香などを用意し、マブイを落とした場所に身内の者（親）が出向いて拝みの言葉を唱え、寝巻きにマブイを乗せて持ち帰り、その寝巻きを本人に着せて、魔よけを頭の上で廻したり、塩を頭にすり込んだりして、額や背中をトントンとたたくと、マブイが戻るという儀式である。

子どもに心身の不調が生じ、病院の検査で身体的に深刻な問題はない、と判明した場合、「心の問題」と告げられてカウンセリングを勧められることがある。原因不明の頭痛・腹痛、何かに怯えているような突然の夜驚、不定愁訴による登園しぶり・不登校など。このような症状の原因が「心の問題」と指摘されると、それは、子どもの心の弱さなのだろうか、親の子育てのまずさなのだろうか、と多くの親が困惑する。

「自分はダメ」「私が悪い」といった思いにとらわ

れている子どもや親御さんに元気になってもらうためには、「問題の外在化」という技法が役に立つ。例えば、いつもお漏らしをしては怒られているAくんに対してカウンセラーが、「遊びに夢中になっていると、どこからか『いたずら小僧』がやって来て、知らない間に『やっちなま』って命令しちゃうんだね。」というふうに声をかける。一方、暗い顔をした不登校のBちゃん親子。親御さんは、自分のしつけが悪いのでBちゃんが登校できないのでは、と悩んでいる。カウンセラーは「Bちゃんや親御さんが悪いのではない。学校に行けないのは、Bちゃんを学校から遠ざけようとしている『虫』のせい。だから『虫退治』の作戦を立てましょう。」などと提案してみる。

Aくんの症状消失、Bちゃんの登校に至るまでのカウンセリング経過については、ここでは省略するが、大事なことは、遺尿や不登校を「いたずら小僧」とか「虫」のしわざと意味づけることで、「心の問題」を「外」に切り離すことである。内側ではどうすることもできない問題でも、外にあれば、自分で眺めることもできるし、親やカウンセラーと一緒に解決に向けて対処することも可能となる。

さて、「マブイグミ」の儀式をこのような視点から見ると、見事な「外在化」の構造に気づかされる。マブイが落ちた状態とは、恐怖、不安、情動が強く揺さぶられるような驚愕体験の後に表れる心因反応と解釈できよう。心の変化や異常体験を霊的なものと結びつけてはいるが、いわば「心の問題」である。しかし、マブイを「落とした」という表現で、内から切り離して「外」に置く。さらに、周囲の身内が協力して、落としたマブイを大事に大事に持ち帰ってくる。本人をとがめることなく、丁寧な手当てが

なされて、マブイは元に納まる。心の内と外とをつなぐ優れた営みが、このようなしきたりとして永く続いてきたことに、改めて沖縄の民間信仰の奥深さを思い知る。

ところで、沖縄のこうした伝統的な考え方が、現代でも通用するのだろうか。大学の講義時間に、学生に「マブイグミ」の経験を尋ねてみた。乳児期・幼少期のことは本人の記憶にないかもしれないので、家に帰って家族に尋ねるよう依頼した。すると、半数以上の学生が「マブイグミ」を自分自身で経験したり、周囲で見聞きしたりしたことがあると回答した。また、数名の学生は、今でも転んだり驚いたりしたときに、「マブヤー、マブヤー、ウーティクーヨー（魂よ、魂よ、追いかけておいで）」と唱える習慣が身につけていて、折にふれて口にするという。「マブイグミ」を体験した若者たちがやがて親にな

り自分の子どもを育てるとき、特に泣き止まない夜泣きに困ったときなどに、彼らは自分がされてきたように「マブイグミ」を行うのかもしれない。沖縄のしきたりの中で、健やかな子どもの成長を皆が見守っていくことだろう。

参考文献

- 大橋英寿. 沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究. 弘文堂. 1998
- 高橋恵子. 暮らしの中の御願 沖縄の癒しと祈り. ボーダーインク. 2003
- 比嘉淳子. 沖縄 暮らしのしきたり読本. 双葉社. 2008
- 児島達美. 可能性としての心理療法. 金剛出版. 2008